

ペルー共和国  
「Republic of Peru」  
作品No. 021-1



製作: 諏訪豪一  
(野々花工房)  
原画: 木越まり  
製作監修: 栗野商事



IMAGINE ONE WORLD  
KIMONO  
PROJECT



~世界は違っても、ひとつになれる~  
"The World Can Unite As One"

一般社団法人イマジン・ワンワールド  
住所: 久留米市中央町31-9(蝶屋株式会社内)  
電話: 0942-34-4711  
FAX: 0942-35-7514  
Mail: info@piow.jp

### ■父なるスペイン、母なるインカ

南米の北東に位置するペルーは、インカ文明の地としても知られ、中世にスペインに征服された歴史を持っている。気候は、海岸地帯、高山地帯、熱帯地帯の三つの気候帯があり、アンデス山脈と高地から成る国土を有している。

ペルーのKIMONOを作成するに辺り、世界的なナスカの研究機関である、山形大学人文学部、酒井教授を訪ねレクチャーを頂いた。その中で、ペルーにおける、旧宗主国のスペインと古来の文明であるインカとの関係を、「父なるスペイン、母なるインカ」とであると坂井教授から教示頂いた。ここから、ペルーのKIMONOのデザインが始まった。

### ■天と地、昼と夜、過去と未来

インカ文明の特徴である三つの対比にコンセプトを定め、着物デザイナーとして活躍する木越まり氏によって、ひな形がデザインされた、そこには、昼を表す「虹」と夜を表す「天の川」、天を表す「空」と地を表す「マチュピチュの遺跡」が取り入れられた。

さらにナスカの地上絵から「フェニックス」と「ハチドリ」を取り上げて「過去と未来」を表現した。

### ■織物の限界を越えて

今回の作品は、プロジェクト初の「織」による振袖を目指した。通常、振袖は絹の白生地にも染を施して製作されることが常識であり、糸を先に染めて織り上げる振袖は、絵模様を表現することには適さない。その不可能に挑戦したのが、米澤の若手工芸家、諏訪豪一氏である。彼は、木越氏から受け取った原画をもとに、先染めの織による製作に取り掛かった。



### ■草木染めとコチニール

肩から胸にかけて描かれる「赤」は、ペルー原産の染料「コチニール」を用い、何度も試行錯誤を繰り返した。色素は、煮出す温度や触媒によって、全く違う色が抽出されてしまう。諏訪は納得のいく赤を抽出するまでに数十回の染を行い、漸く納得のいく赤の抽出に成功した。また、焙煎を変えることで「黒」の抽出にも成功し、先ずは第一段階をクリアした。草木染め100%を唯一証紙に貼ることを認められている工房のプライドにかけ虹色のオレンジや黄、緑、グレー、藍、は、紅花の赤に黄茜を混ぜて作成するなど、それぞれの染料から取れた色を混ぜることで、見事なレインボーカラーを生み出した。

まさに、草木染めを知り尽くした工房ならではの色彩が作品を彩っている。

### ■すくい技法を駆使し絵模様を織る

経糸と緯糸が直角に交差する「平織」では、紺を用いたとしても単純な文様しかおろ上げられないのが常識である。そこに、絵模様を織り上げるために行ったのが「すくい」である。

米沢でも時間と手間のかかる高級な技法であるが、そのすくいを用いて織り上げられたのが、「ナスカのフェニックスおよびハチドリ」そして「世界遺産マチュピチュ遺跡」である。

作品を見るとわかるように、すくいによって表現された面積は膨大である。

ハチドリは金糸、フェニックスは銀糸、そしてマチュピチュは藍の濃淡、今にも動き出しそうな躍動感ある地上絵と凜として風格溢れるマチュピチュ。見る者の目を奪う傑作である。

最後に、経糸と緯糸は全てつながっている、当然ながら織り上げていくうちにズレが生じるものである。これを経糸一本一本の張力を調節し、織り手の打ち込みを調整しながら「絵羽」の作品にしたこと自体、奇跡である。作者は、これまでもこれからこの作以上に命を込めた作品は作れないだろうと回想している。着物の歴史に新たなページを刻む圧巻である。



## 製作者 渡文 技法



### ■西陣の雄として

西陣の老舗「渡文」は西陣織工業組合の代表を務めるなど、数々の公職で社長の渡辺隆夫氏が活躍する西陣のリーダーである。

今回は、社長の弟にあたる専務様が製作の責任者を引き受け、デザインに取り掛かった。

当然のことながらこれまでに発表された作品のクオリティは十分に理解されているため、老舗の誇りとプライドにかけて製作が始まった。

### ■8枚もの図案から磨き上げたデザイン

今回のデザインを決定するにあたり、渡文さんは8種類ものデザイン案を提示した。

その中で、KIMONOとの相性、振袖に締める華やかさ、締めた時の美しさを考慮して、ひとつのデザインへと絞り込んだ。その結果生まれたのが「ナスカ地上絵図」である。

### ■和紙を用いた太箔

ペルーのKIMONOは織で表現されているために、帯にも質感の工夫が欠かせない。

そこで、渡文が独自に開発した「太箔」を織り込むことにした。これは、通常では考えられない太さの箔を織り込む技術で、それによって、微妙なカジュアル感とお洒落さを醸し出している。

### ■若手の女性による全通の織り

今回の織り手は、渡文さんが期待する若手の女性が担った。彼女は、今回のプロジェクトに参加することを誇りに感じ、これまで以上に精を出して織りに打ち込んでくれた。

太箔と金糸、鮮やかな色系を全通で織り上げることは、彼女自身にとっても初めての経験だったが、打ち込みの強弱も見事に素晴らしい作品が織り上がった。

### ■浮かび上がるような地上絵

この帯の色彩は「虹」をモチーフにしています。そして、紫色であらわされているのが「天の川」です。その虹色を効果的に宇上上らせている「金糸」や「箔」が全体にインパクトを与えています。色彩と配色の見事さから醸し出される躍動感、太箔を用いたことから生まれる立体感、そして丹念な手織から醸し出される高級感。

西陣の雄としてのプライドとペルーへの愛情を感じ取れる作品が完成しました。



イマジン・ワンワールドの作品に寄せて  
(文責プロジェクトリーダー高倉慶応)